
DRAGNEEL

D E G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D R A G N E E L

【Nコード】

N 7 7 7 9 D

【作者名】

D E G

【あらすじ】

太古に滅んだといわれる「竜」とはなんなのか。鉦山遺跡で働くアリユーは、竜の遺物を発見する。そして竜の存在は彼の思惑を超え、世界が危機にさらされる……アリユーは一人の人間として、生きる覚悟を決める。

第一章（前書き）

始めに……終わりはあっさりしてます。歴史などややこしいですが、気軽に読み進めてください。

第一章

廃れた、大きな鉱山があった。

廃れた、といっても鉱山自体はまだまだ未発掘の地帯が多く、充分な機能を果たすことは出来た。

しかし鉱山で働く労働者達の姿はなかった。

この鉱山は、鉱石採掘を目的に機能しているわけではなかった。

鉱山の麓に雨が降りだした。

道を歩いていた男が何か不平を呟きながらコートの帽子をかぶり、道を急いだ。

男は鉾山の麓町の酒場へ向かっていた。

男は酒場へ入るとコートを脱ぎ、カウンターに腰をかけた。

酒場は大勢の男達で賑わい、極めて騒がしかった。

しばらくすると、カウンターの向こうから酒場の主人の女が男に声をかけた。

「遅かったわね。あんただけよ、最後までいたの。」

男はこれを見捨てて女に手で催促した。

すると女は男にジョッキを出し、男はそれをグイッと一飲みした。

「……………うるせえ……………」

「あら、余計な事言ったかしら？」

「……違う……」

男は、後ろで騒いでいる男達に向けて鬱陶しそうに顔を揺らした。

「ここはそういう場所なのよ。嫌なら他へ行つてちょうだいな。」

「……………」

男は少し表情を曇らせた。

女が笑いながら言った。

「冗談よ。あんたはここにいていいのよアリユー。」

アリユーと呼ばれた男はジョッキから酒を飲み、黙り込んだ。

女はグラスを拭きながら話し続けた。

「しかしあんた、酒はいつちよ前に飲むわよね。まだ十代のガキんちよのくせに。」

「…これ以外に楽しみがねえんだ、悪いかよ。」

「ま、それもそうね。こんな場所なんだから好きなようにするといいわ。」

今度はグラスに酒を注ぎながら女が言った。

「あたし達はまだ幸せな方よ。変な遺跡のお陰で仕事があるんだから……はいよ。」

女は喋りながらカウンターの客にジョッキを出した。

相変わらずアリューは黙り込んでいた。

すると今しがたジョッキを出された客がアリューに話し掛けた。

「おいおい、相変わらず暗い顔してやがんなアリュー？お前さんだけだぜ、こんな一攫千金を喜んでねえ奴あよ！」

「……知るかよ。こんな鉱山発掘まがいなのが嬉しいんだ。」

「バカ、おめえ鉱山発掘じゃねえ、遺跡発掘だ！」

「どつちでも同じだろ、何が出るか出ないかわからねえん……」

「遺跡といえばだなあ、未知のお宝で溢れてるもんだ！つたく鉱山の管理人も気前のいい奴だと思わねえか？見つけた財宝はほとんど俺達にくれるんだぜ！？しかも発掘代、労働賃まで……」

話の止まないトレジャーハンターにうんざりしたのか、アリューはまた黙り込んだ。

「はいはい、アリユーも疲れてるんだからそれ以上は止め。…あんたももう上に行つといで。」

止めに入った主人の女に、またしても夢見る男は話しだした。

「畜生、アリユー！なんでこんないい女と一つ屋根の下で生活してんだ！レイラちゃんもなんでこんなガキんちよと…」

酒場の主人レイラは酔った男の相手をしながら、アリユーに酒場の2階へ行くよう合図した。

アリユーは黙って席を立ててカウンターの奥へ行き、酒場の階段を上がっていった。

外ではまだ雨が降っていて、遺跡のある鉾山の土壌を緩くしていた。

近年、この鉱山で考古学的遺物が出土した。

それはまるで竜のような姿をした、古めかしい像だった。

鉱山の管理人は、初めはこれについては考えず、鉱山の発掘を続けた。

しかし発掘が進むにつれ、同じような竜を印した遺物が次々に出土し、この情報は世界に広がった。

するとある時、突然現れた一人の学者がこの鉱山を買い取り、遺跡として発掘を進めだした。

学者の名は
ル・グエン＝ゲイル。

ゲイルは以前の鉱山労働者だけでなく、世界各地から金目当てのハンターを募り、発掘に協力させた。

彼は価値ある財宝等には目もくれなかった。

新たに出土した遺物は、ゲイルが確認した後に全て発掘した本人達の手に移っていった。

そのため、宝を求める男達がこの鉱山もとい遺跡に集まり、発掘を行っていた。

アリユーは木のベッドにドサツと倒れ込んだ。

ベッドがギシギシと軋み、外の雨の音が絶え間無く聞こえていた。

アリユーは鉱山の近くで見つけた捨て子だった。

酒場の主人であるレイラが彼を引き取り、アリユーと名付けられた彼はレイラの酒場で育てられた。

アリユーはこの鉱山の町で育った。

そのために歳が二桁になった頃には、彼は労働者として鉱山発掘に駆り出された。

アリユーは極めて無感情な青年だった。

彼は金に興味が湧かなかった。

金というものにどれだけの価値があるのか、わからなかったからである。

レイラの酒場とアリユーの労働賃で、男女二人の食べる物は不自由ではなかった。

ただ、アリユーは何事にも興味を示さなかった。

ただ彼は働き、この鉱山の町に生きていた。

アリューは窓から遺跡の鉦山を眺めた。

雨に打たれて、その光景は一層殺風景に見えていた。

アリューは溜め息をついた。

次の日も、遺跡の発掘に駆り出され、雨が降っていようが関係なく今日のようにくたびれた自分がここにいる。

竜の遺跡がなんだ。

金がなんだ。

アリューは無常感に浸っていた。

彼は生きていればそれで良かった。

ただ彼の前には生きているという事実だけがあった。

しばらくすると雨も収まり、外の景色が闇色に染まってきた。

アリューはまだ寝そべりながら呆然としていた。

ちょうどその時、レイラの声が下から聞こえてきた。

「ア〜リユ〜、片付いたわよ〜降りといで〜！」

アリューが酒場へ戻るとまだ少し洗い物が残るキッチンで、レイラが食事を用意していた。

「はい座って。今日はあんまり贅沢じゃないわよ。」

夜になり、一時の休憩の時間が出来た酒場は昼と違って騒いでいる男達はおらず、静まり返っていた。

アリューはカウンターの席に腰掛け、出された食事を眺めた。

焼いた肉の横に、蒸した芋や野菜が並んでいた。

といっても量は多いというわけではなかった。

パンを足しても、少し腹がふくれるかふくれないか、その程度だった。

しかしアリューはこれを見て、満足そうに食事に手を付け始めた。

「いただきます?。」

レイラが少し笑って言った。

「…いただいてます。」

「はいどうぞ。…ごめんね、少ない分量で…。」

アリューは食べながら言う。

「充分だよ。」

「バッカ、あんた炭鉱マンっていうのはもつとドカ食いするもんなのよ。それにあんたくらいの歳だったら…」

「…充分だよ。」

アリユーが二度言つと、レイラは申し訳なさそうな顔をしながら「そう」とだけ言った。

レイラもアリユーの横に座り、同じような食事を始めた。

「こんな町だからね…物価が上がるのよ、一儲けしたハンターが多いから。」

するとアリユーが囁むのを止めて言った。

「…俺も…財宝の一つでも見つけりゃ…」

「ああいいのいいの！あんだだつて頑張ってくれてるじゃない！それに…」

レイラは溜め息をついて言った。

「…あんたまで死んじやったら…一人になっちゃうじゃない…」

こういうと二人とも黙り込んでしまった。

レイラの父は酒場を経営しつつも、鉱山で働いていた。

また、彼はゲイルが鉱山を買い取った後も遺跡発掘に精をだしていた。

彼もまた財宝を狙っていたのだった。

そして、レイラの父は落盤によって命を落とし、酒場は血筋関係のないアリューを抜いてレイラ一人で経営していた。

余りレイラの父とは話したことがなかったアリューにとっては、彼女は唯一人の家族だった。

「……ごちそうさま……」

「……ん。」

アリューは食事を終えて席を立った。

不意にレイラが話した。

「ねえ、何であんたもあんな場所で働くの？別にここで働いてもいいのよ？」

するとアリューは少し恥ずかしそうにし、小声で言った。

「だってよ…その方がレイラも楽になるだろ…」

レイラはまた、謝るような声で言った。

「ふーん…ありがとね。」

そして今度は悲しい声で言った。

「でも…死んじゃ嫌よ。あんたは生きてるのが楽しくないかもしれないけど…私はアリューに生きてもらえれば充分楽しいからね。」

アリューは考えるように俯き、やがて階段を登っていった。

外ではまた雨が降り出していた。

第二章

鉱山がぼんやりと太陽の光に照らされ始めた。

ハンター達は、既に鉱山に向かっていた。

アリユーもまた、彼等にとこうと酒場で準備をしていた。

レイラはアリユーに弁当を持たせると肩を叩いた。

「はい、いつてらっしゃい。またあんまり遅くならないようにね。」

「……………」

アリユーは無言でレイラに別れの一瞥をくると、足早に鉱山の採掘場へ向かった。

既に男達が宝探しに熱中している中、アリユーは支給された道具を持って鉱山内部に入っていた。

鉱山は以前にある程度採掘が進んでいたため、内部には割と路が多く作られていた。

とはいえ、その路は鉾石採掘の為に掘り進められたため、基本の順路でしかなかった。

ハンター達は自分勝手にそこら中を掘り進んでおり、下手をすればどこで落盤が起こつても不思議ではない状況だった。

アリユーは危険が少ないまだ誰も手を付けていない（無論、以前の発掘者達が掘った後だが）人気のない場所を発掘していた。

しかし鉾石採掘にもあるポイントがあるように、遺物発掘にもよく出る場所と出ない場所があった。

アリユーの掘り進めている場所はその出やすいポイントからかなり離れていたため、人がいないのは当然の事だった。

アリユーはしばらく掘り進めた後、手を止めて近くの地面に座り込んだ。

アリユーはこのポイントを三日も掘り続けていた。しかし未だに何一つ出てくる気配はなかった。

アリユーは土のついた体を払い、赤くなった自分の手を眺めた。

アリユーは溜め息をつく、また無気力感に襲われた。

周りにはランプが所々に吊られた薄暗く、肌寒い土の路以外何もない。

目の前には微かに照らされている無意味に赤くなった手がある。

あと何日掘れば宝が出てくるのか解らない黒い壁がある。

アリユーはしばらくすると立ち上がり、また壁にシャベルを挿し始めた。

と

カッン、と何かが触れた感触がした。

アリユーは一瞬ドキッとした。

いよいよ自分にも運が廻って来たと思うと胸が高まった。

アリユーはもう一度場所を確認すると、その回りを掘っていった。

それは割と大きな物だった。

アリユーは心臓が脈打っているのを感じながら更に掘り出し、ようやく取り出して地面に置いた。

どうやら箱のような物だったが、かなり風化してから埋まったのかまわりはボロボロになっており、鍵のようなものが付いていたがそれすら機能していなかった。

アリユーは箱を開けようとした。
その瞬間、

「グウウ…」と彼のお腹が鳴った。

夢中で気付かなかったが、いつの間にか昼になっていたようだった。
（ここに時計というものはなかったが、アリユーの体内時計がそう
告げていた。）

アリユーは一旦箱を置き、朝レイラに渡された弁当に手を付けた。

これは彼の唯一の楽しみだった。

言うまでもなくその量は少ないものではあったが、アリユーにとつ
てはレイラの作った弁当はこの暗い淋しさの増す鉱山内で唯一、自
分が独りではない事を感じられる物だった。

中身は小さなパンに焼いた肉を挟んだものが二つ、それに昨晚の料
理の残りの野菜が入っていた。

アリユーはパンを一つ手に取った。

「……いただきます。」

一人で彼は呟くとパクパクと弁当を食べ始めた。

食べながらアリユーは箱を手元にやり、鍵のついた場所を眺めた。

鍵が付いているほど大事な物だったのだろうか？

アリユーは箱の中身を想像しながら、ゆっくりと壊れた鍵をとろうとした。

鍵は外れ、地面に落ちた。

アリユーは箱の蓋に手を掛けて、緊張しながら中身を覗いた。

中にはなにやら本のような物が入っている。

蓋を完全に開けてみると、大きな本が一冊入っている以外は何も見当たらなかった。

それをしばらく眺めるとアリユーはそろそろと本を開いた。

が、アリユーの予想通り中に書いてあるのは全く見たことのない古い文字ばかりだった。

さらにパラパラとめくっていくと、何か描かれているページがあった。

掠れていてよく見えないが、牙の生えた動物が火を吹いているような絵が描かれている。

その動物のものが解らないが、翼らしきものも一緒に描いてあった。

アリユーは特に興味が湧かなかったのか、一つ目のパンを食べ終わると同時に本を閉じた。

すると、本を閉じた拍子に箱の中で何かがカタツと動いた。

アリユーはもう一度箱の中を調べた。

隅の方に何かが落ちている。

「……………指輪……………か？」

手に取ると、すつぱりと指に入りそうな古ぼけた金属の指輪だった。
まだ新しく見える程に状態が良く、光沢もある。

これはかなり金になる、と感じたアリユーは少しにやけてきた。

そして残りの弁当を素早く食いと指輪を箱に戻し、道具を片付けて
鉱山の外へ箱を持ち出した。

鉱山で出土した遺物は、一度管理人ゲイルに見せなければならぬ
為、アリユーは直ぐさまゲイルのいる発掘本部に向いた。

ベースキャンプのテントからは宝を持った男達が出入りしている。

しばらく待った後、テントからル・グエン「ゲイルが姿を現した。

「やあ、次は君だ入りたまえ。」

アリユーはゲイルの姿をみたことがなかった。
今まで一度も会う必要がなかったからである。

ゲイルは学者のような落ち着いた雰囲気醸し出しており、アリユーはそういった人物に出会うのは初めてだった。

テントに入るとゲイルは椅子にフワリと座り、髪のない頭をかいだ。

アリユーはすぐにどうすればいいかわからなかった。
するとゲイルが催促した。

「どうした？何か見つけたのではないのかね？」

「あ…ああ……」

アリユーはそそくさとゲイルの前の机に箱を置いた。

「ほう、かなり大きいな…中には何が入っているのか…」

ゲイルは箱の蓋を開け、本を眺めた。

「……これは……」

「中には…何かよく解らない文字が書いてあっただけだぜ。」

ゲイルは頷くと箱から本を取り出し、まじまじと読み始めた。

「…読めんの？」

しかしアリューの質問を無視し、ゲイルはさらにページをめくっていった。

アリューは黙ってその様子を見ていた。

と　　不意にゲイルの表情が一変した。

突然狂気すら感じられる笑みを浮かべ、本を閉じるとアリューに向き直った。

「よく見つけてきてくれたな！これは……そう、とても…素晴らしい物だ。ああ…そうとも……」

アリューはわけがわからず黙っていた。

ゲイルはなお不適に笑い、気付いたように喋り出した。

「ああ代わりの金を渡さなければな。好きな金額を言いたまえ。」

しかしアリューは突然の成り行きに困っていた。

「えっ…と……」

「ん？なんだ言いにくいのかね？では…」

そう言うとゲイルはおもむろに近くにあった鞆を手にとった。

「さあこれに一億の財産が入っている。これでは不満かね？」

いきなり法外な数字を聞いたアリューはどう答えていいやら解らず、もごもごと言った。

「いや…別に…」

ゲイルは機嫌良く

「では」と言うとアリューの手に鞆を押し付け、相変わらずニヤニヤしながら本を抱えた。

アリューは残った箱に気付いて席を立とうとしたゲイルに尋ねた。

「あの…この箱の…」

「ああ構わん構わん、後は好きにするが良い。」

ゲイルは本以外には全く興味を示さずにさっさとテントの奥に引っ込んでしまった。

アリューは啞然としていたが、箱の中の指輪だけ取り出すとゲイルに押し付けられた鞆を持ってテントを出た。

とにかくこれでやつと楽になる。

あんな本に異様に魅入っていたゲイルの様子は腑に落ちなかったが、アリューはとりあえず宝を見つけた事に満足していた。

アリューは脚を速くして酒場に戻り、いつものようにカウンターの席にドカツと座った。

しばらくして、レイラがアリューの存在に気付いてカウンターへとんできた。

「随分早いじゃない！何かあったの！？」

心配そうな顔をしているレイラを見てアリューはニヤニヤした。

「……？何よ、なんで笑ってるのよ。」

しかしアリューはまだ笑いながら飲み物を催促した。

レイラは不思議そうな顔をしながら酒を出し、アリューはそれを一飲みすると満足そうな顔になった。

レイラがハッとしてアリューに顔を近づけた。

「…なんか見つけたの？」

アリューはゆっくり頷き、少し寝てくる、と言って鞆を持つとゆったりと二階へ上がっていった。

この時彼が見つけたものが、後に彼にどんな運命をもたらすか、アリューには知る由もなかった。

日は沈み、外は暗い夜になろうとしていた。

第三章

アリューは満足気に、レイラが目を丸くして驚いている顔を眺めていた。

夜遅くの酒場には、ただひたすら鞆を開けて立ち尽くすレイラの高い声が響いている。

アリューは黙ってその様子を見てにやついていた。

「い…え…一億って…！？あんだ…騙されたんじゃない……ううんでもこのお金は本物…」

「…そんなに驚くほどの大金なのか？」

レイラは鞆にぎっしり詰まった札束を見つめたまま震えながら咳ばらいをし、アリューの方を向いた。

「あのねアリュー…さっき食べた晩御飯の骨付き肉、あれ一つで四十ジエンね。今日あんに渡したお弁当、あれでも大体百ジエン程度なのよ。」

「…だから…？」

「お父さんが汗水流して稼いで建てたこの酒場、いくらだと思っ？」

「…一万…くらい？」

レイラは首を大きく左右に降ってアリューに迫った。

「一千万！これで経営費込み！…一億ジエンってどのくらいかわかる？この酒場で私が百年飲まず食わずで働いても全然足りない位の、すっごい大金なの！」

「……怒ってんのか？」

アリューが少し機嫌を悪くしたのを見て、レイラは落ち着きを取り戻してから喋り出した。

「興奮してるのよアリュー…これ…本当に管理人からもらったのよね？」

「ああ、本と交換に…」

「…今までに色々な客の話を聞いてきてるけど…直接財宝とお金を交換したって話は聞いたことがないのよ。それに、一億なんていう数字も一度も耳にしたこともないし…」

「…なんか…悪いことしちゃったか…？」

アリューは低い声で呟いた。

レイラは咄嗟に返した。

「そんなことないない！！すごい事なの！私だってすごく嬉しいんだから！」

「じゃあいいじゃねえか。」

レイラは何かを言いかけたが、押し止めて一息ついた。
そして今度は笑いながらアリユーの頭を撫でた。

「…ごめんね…ちょっとすごいからビックリしちゃって…アリユー
がせっかく持ってきてくれたんだもんね。本当に嬉しいのよ?」

頭を撫でられながらアリユーは恥ずかしくなってレイラから顔を背けた。

レイラはニツコリと笑いながら言った。

「なーんか…どうしたら良いのか分かんないわ。どうしよっかこの
お金…」

アリユーは顔を背けたまま呟いた。

「…レイラの…好きに使えよ…」

レイラは目をぱちくりさせた。

そして決まり悪そうにしているアリユーを見ると、穏やかな顔になった。

「…フツッ、ありがと。…でも私はアリユーが喜ぶことならなんでも
いいかな?。」

いきなりの言葉に、今度はアリユーが思わずレイラの方を向いた。その様子を見てレイラはまた微笑む。

「何か欲しい物とか、したい事とかある？」

「な…なんで俺に聞くんだよ？」

「いいから答えなさい。」

何かあるでしょ？」

アリユーはレイラに押され気味になると、目を逸らして黙り込んだ。レイラも黙ってアリユーが口を開くのを待った。

「…レ…レイラと…行きたい…」

「なに？」

「レイラと…他の街に行きたい…」

アリユーは口をもごもごさせて言った。するとレイラは少し淋しげな声で答えた。

「アリユーは…この街を出たいの？」

勿論、それはこの二人が育ってきた、レイラの父の酒場を捨てることを意味していた。

アリユーにもそれは解っていた。

アリユーはレイラの顔を見た。

レイラもアリユーをじっと見つめている。

「…悪い…別にいいんだ。」

レイラはフツと息をつき、立ち上がると言った。

「いいのよ、アリユーがそうしたかったら。…でもちよつと考える時間が必要ね。もう寝ましょ。」

アリユーは相変わらず微笑んでいるレイラを見つめた。

そしてコクンと頷くと、立ち上がって階段の方に向かった。

レイラの声が後ろから聞こえた。

「明日はなんか美味しい物食べようね。」

「……うん。」

アリユーは後ろを向いたまま頷き、自分の部屋へ戻っていった。

アリューは不思議な気持ちだった。

レイラは喜んでくれていた。

もうこれで苦しい生活から逃れることができる。

しかしアリューの外に行きたいという願いもまた苦しい選択だった。

レイラも酒場を捨てるというのは辛いはずだろう。

それでもアリューは宝を見つけることが出来れば、この鉱山の外に出られるはずだと思っていた。

アリューはなにか茫然としていた。

目標を失ったような、そんな喪失感を感じていた。

「……………何がしたいんだか……………」

アリューは溜息をつきながら呟いていた。

アリューは窓の外に目をやった。

月が出ている。

雲一つない、綺麗な月が見えている。

レイラが幸せになればそれでいい。

けど、本当にレイラは今幸せなんだろうか？

俺さえ生きていればいいと言っていた。

俺が幸せになればいいのか？

しかしアリューには自分の幸せ等、なんのことかわからなかった。

アリューはまた無情感に襲われた。

と、その時指輪のことを思い出した。

服のポケットに手を入れると、美しい指輪が月光に照らされた。

これをレイラにあげたら喜ぶかな……

そんな事を考えた。

考えるとアリューはなんだか嬉しくなってきた。

金の使い道はまた考えればいい。

明日はレイラと一緒に酒場で働こう。

指輪を眺めながらアリューは幸せな気分になっていた。

アリューは綺麗な指輪を何気なく、指にそっとはめてみた。

一瞬、気が遠くなるような感覚に襲われた。

アリユーの頭に、巨大な翼の生えた竜のイメージが流れた。

そしてそれは走馬灯のように何かの記憶を映し出した。

アリユーは竜の存在を感じ取った

気付くとアリユーはハアハアと息を切らしていた。

目の前にはいつもの木のベッドのある見慣れた部屋がある。

さっきの竜の光景がはつきりと目に焼き付いていた。

アリユーは竜というものを知らなかったが、それが竜だとわかって

いた。

翼の生えた巨体。

牙の並ぶ口は炎を吹いている。

そして空に浮かぶ恐ろしい影。

アリューは頭がおかしくなったのかと思った。

指輪をはめた瞬間の出来事だった。

アリューは指輪をはめたままベッドに入った。

頭から恐ろし気な竜の姿が離れない。

何なんだ？

一体何が起きた？

何故竜だと解った？

この指輪に何かあるのか？

アリューは指輪を急いで外すと、毛布に包まった。

すると頭から何かが抜けたような気がした。

はつきりとしなが、何かの存在を忘れてしまったような感覚だった。

アリューはわけがわからなかった。

目をつぶり、何も考えないようにした。

そしてアリューはいつしか眠りについていった。

レイラの声が聞こえる。

いつもは下に降りてから聞く声だ。
自分の名前を呼んでいる。

「アリュー！ねえ起きてよアリューって！」

「…む…なに……」

アリユーがシバシバと目を開けると、大きなレイラの顔が映った。

アリユーは驚いて横に飛びのいた。

「うわっ…！？何だよ…？」

「ねえ昨日鉱山で何かあったの！？」

起きぬけに尋ねられたアリユーは面食らってしまった。

「…？何もねえよ…どうしたんだ？」

「鉱山の管理人がいないらしいのよ！」

「…はあ？」

アリユーは益々面食らった。

朝早く、酒場を出ると普段は鉱山に向かっているはずのハンター達が集まって何やら騒いでいた。

「どういつことだ！？これじゃ何にも出来ねえじゃねえか！」

男達が不平をあげている。

アリューはレイラに尋ねた。

「…何が起きたんだ？」

「…鉱山の管理人がいなくなって採掘活動が一切不可能になったのよ…」

「何でそんないきなり…」

「あんた何も知らない？ 管理人が何処に行ったのか…」

勿論、アリューもそれはわからなかった。

しかし、気掛かりはあった。

「…昨日の本…」

「え？」

「昨日あの金と交換した本と…何か関係あんのかな…」

「何か言ってたの？」

「いや…ゲイルって人が異様に本に執着してたから…」

そう言うと、アリューの脳裏にふと昨日の竜の光景が甦ってきた。

アリューはまた頭が痛くなった。

「…中に戻るっぜ…」

二人は酒場に戻ろうとした。

その時だった。

聞いたこともないような悍ましい唸り声が空に響いた。

全員が咄嗟に空を見上げた。

そして次の瞬間、アリューは自分の目を疑った。

空に浮かぶ巨大な翼と牙のの生えた影。

記憶に焼き付けられたそれが何であるかを、すぐに直感した。

竜がそこにいた。

第四章

これは夢なのか？

夢にしては、余りにも意識がはっきりしている。

指輪をした時の幻か？

でも今は指輪をはめてはいない。

これは現実だ。

あの恐ろしい、巨大な竜が目の前にいる。

竜はもう一度、凄まじい雄叫びをあげた。

その場にいた人間達が蜘蛛の子を散らすように逃げ惑い、アリユーもレイラの腕を持って酒場の中に駆け込んだ。

二人は二階のアリユーの部屋に飛び込んだ。

レイラが震えている。

「何よ…ちょっと待ってよ…何なのよ…？」

「竜だ…」

息を切らせながらアリユーはレイラの肩を寄せた。

外からは何かが破壊される音や悲鳴が混じって聞こえてくる。

「竜って何…？何で？」

混乱しているレイラを、アリューはさらに抱き寄せて宥めた。

ふと、アリューの目にあの指輪が見えた。

ひよっとすれば何かあるかもしれない。

アリューは指輪を手にとると、昨日のように中指にはめた。

指輪はスルリと入った。

と、アリューの記憶に何かが流れ込んできた。

それは別の生命の記憶だった。

アリューはそれが竜の記憶だと理解した。

その時、轟音と共に部屋の壁が燃えだし、竜の白い頭がアリュー達の目の前に現れた。

レイラが縋り付いてくる。

アリューは強く念じた。

『来い

！！』

空で新しい唸り声が轟いた。

二人を襲おうとしていた白い竜が空を見上げた。

白い竜の首に、碧い口が噛り付いた。

その瞬間アリューはレイラを抱いて部屋を飛び出した。

「…アリュー！？」

「大丈夫だ…！！」

アリュー達は酒場を出ると、二頭の竜達の所へ走った。

白い竜より一回り大きな碧い竜が肉片を口に加えていた。

下には血の海と共に、先程の白い竜が横たわっている。

レイラがアリューにしがみついていた。

「…食べちゃったの…？」

「…そうらしいな…」

碧い竜はアリュー達に気付くと、肉片を離して彼等の方を向いた。

レイラは後ずさりしたが、アリューはじつと竜を見つめた。

腕が翼と一体化し、一見小柄に見えそうな体は、翼を広げると巨大な恐ろしい姿を醸し出している。

碧い竜は身体をのしのしとアリューに近づけていった。

アリューはさらに逃げようとするレイラの手を握った。

「…大丈夫だ。こいつは違うから…」

するとレイラはアリューの手を強く握ったままじつとしていた。

碧い竜はアリューの目の前まで近づくと、首から頭をアリューの目に線にゆつくりと下げた。

その姿を見ると、常人ならばすぐに逃げ出しそうな程に彼等は接近していた。

『…我が新たな主人よ…願いは果たしました…』

アリューの頭の中に碧い竜の声が静かに響いた。
そしてアリューもまた、静かに竜に話した。

『助かった…ありがとうノア…』

そう言い終わった瞬間、アリューは自分で驚いた。
彼は人間ではない言葉を話していた。

後ろを見ると、レイラも目を丸くしてアリューを見ている。

勿論、アリューは元々そんな言葉を知っている訳ではなかった。

ただ彼は無意識に、竜の言葉を発していたのである。

レイラが口をパクパクさせながら言った。

「ア…アリュー…何それ…？何言ってるの…？」

アリューはもう一度、頭の中で人間の言葉を思い出して答えた。

「えっと…俺にもよく解らない…」

「今…その…竜と話したわよね？何だったの？」

益々混乱しているレイラを落ち着かせるため、アリューはもう一度
碧い竜に話し掛けた。

『…お前の名前はノア…俺達の味方だな？』

するとまたアリューの頭にノアの声が響いた。

『はい…貴方の味方です我が主人よ。』

少し

「貴方の」という部分が強かったが、アリューは再びレイラの方を向くと優しく言った。

「大丈夫だ…この竜は俺達の味方だ。心配ない。」

レイラはアリューとノアをしばらく見比べていたが、やがてアリューの側を離れないように、ゆっくりノアに近づいていった。

「…噛んだりしないわよね？」

アリューが

「大丈夫だ」と言おうとした瞬間、ノアの意味がアリューに伝わってきた。

「貴方の大切なものには危害は加えません。我が主人よ。」

驚いたアリューは竜の言葉でノアに言った。

「お前…俺の記憶がわかるのか!？」

「貴方の指輪を通じて我らは全てを共有します。貴方にも私の記憶が読める筈です。我が主人よ。」

やはりこの指輪はかなり特殊な物らしい。

しかしアリューにはノアの記憶がイマイチわからなかった。

「お前の記憶つてのがよくわからないんだが…」

『それは我らが完全に同調していないためです。私にも貴方の記憶の断片しか読み取ることは出来ません。我が主人よ。』

アリユーはだんだん頭がこんがらがってきた。

そして追い撃ちをかけるように耐え兼ねたレイラが横から言った。

「ねえ…何話してるのよ…全然解んないんだけど…」

「えー…つまり…この指輪で俺達は会話できて…」

「指輪？」

レイラはアリユーの左中指を覗くと、まじまじと指輪を眺めた。

「へえ…じゃあ私もこれをはめたら竜と喋れるの？」

「さあ…やってみるか…」

そう言うと、アリユーは指輪を外そうとした。

『契約を破棄なさるのか？』

「！？」

突然アリユーの脳裏にノアの声が響いた。

『我と契約を交わした人間の血族である貴方が指輪を外すということとは、竜の契約を破棄することになる。』

咄嗟にアリューは指輪を外そうとした手を離した。

「アリューどうしたの？」

レイラがまたアリューに隠れた。

先程とはまるで違う、殺意さえこもった口調でノアはアリューに語りかけていた。

『貴方は契約を破棄なさるのか？』

『…契約とか…どういう話だ…？契約は破棄しない。説明しろ。一体この指輪は何なんだ？血族ってなんだ？』

アリューがそう言うのと、ノアはまた従順な態度に変わって語りだした。

『…解りました。しかし口からは説明することが出来ない。貴方に私の記憶の一部をお見せしましょう。我が主人よ。』

碧い竜ノアはそう言うとき大きな眼を光らせた。

そして次の瞬間、アリューの脳裏にまた竜の記憶の映像が流れ込んできた。

大空が見える。

やけに暗い。

横にはあの白い竜の大群がいる。

村が見える。

記憶の視界が村に近づいていく。

白い竜達は村に向かって一斉に炎の息を吹き出した。

村はあっという間に火の海と化した。

誰かが白い竜達に語りかけた。

『殺せ…消し去れ…滅ぼせ…我らを脅かす人類を！！』

白い竜達は共鳴して叫びあった。

アリユーは何が起こっているのか解らなかった。

人間を滅ぼす？

何故？

竜達は何をしているんだ？

そう考えた時、記憶の場面が別の場所へと移り変わった。

今度は巨大な都市が見えた。

見たこともない機械のような物が沢山建っており、煙をあげたり、大きな音を立てている。

その都市の周りは緑一つない、砂漠だった。

その時、竜達の咆哮が轟いた。

また、白い竜達に声が語りかけた。

『これは人類の業だ！！見よ！彼らは我らの敵だ！滅ぼせ！この世界に居てはならぬ存在を！！』

また白い竜達は共鳴の唸りをあげ、巨大な機械都市に向かって襲い掛かった。

アリューはハッとなって気付いた。

これはノアの記憶だ。

ノアが竜達に話しているんだ。

でも人類を滅ぼすなんて？ノアは味方じゃないのか？

場面はまた移り変わった。

ノアはひどく傷ついているようだった。

金属の瓦礫の中に横たわっていた。

『私と…竜の契約を結ぶのだノア…！』

目の前に傷だらけの男が立っていた。

竜の言葉を喋っている。

何者だろう？

ノアが呻いた。

『貴様…古の契約を…』

男の声がさらに響く。

『我はザムナン！我は我が業を受け入れ、この竜と指輪の契約を誓う！』

指輪？

よく見ると男は、あのアリユーのしている指輪と同じものをはめて

いる。

ノアはさらに呻き声をあげ、ザムナンという男も呻きながらノアに近づいた。

突然、男の身体に醜い爪痕が浮かび出した。

するとその瞬間、アリユーの体に異変が起きた。

そして暫くすると、ザムナンの指輪とノアの体が光り始めた。

ノアも激しいうめき声をあげている。

光りが止んだ。

と同時にザムナンはよろよろと立ち上がり、アリューも苦痛から解放されていた。

ノアがあのだ従順な声で喋り出した。

『…仰せのままに…我が主人よ。』

そこで突然、記憶の画面が途切れた。

気付くとアリユーはレイラの顔を見上げていた。

レイラがハツとしてアリユーに顔を近づけた。

「アリユー！？」

「う……ん……？」

アリユーはゆっくりと体を起こした。

「大丈夫なの……？それ……」

「え……」

アリユーがふと手を見ると、ザムナンに浮かび上がっていたものと同じ形の痣が所々に浮かんでいた。

アリユーにはそれが何を意味するものが解っていた。

「…大丈夫…だ…これは人間の罪らしい…」

レイラがキョトンとした。

「罪って…なに？」

アリユーはゆっくり記憶を整理しながら話した。

「…昔…ずっと昔だ…人間が世界を汚していたんだ。」

レイラがなにか質問したそうな顔をしたが、その前に素早くアリユーは続けた。

「『機械』っていう、人間が自分達のために造ったものが、竜達の…竜だけじゃなくて他の生き物の世界を壊していた。…人間が住んでいた場所以外は砂しかなかった。」

レイラは黙って耳を傾けていた。

ノアもじっとしている。

「それで竜達が怒ったんだ。…人間を沢山焼き殺してた。」

「…この竜は大丈夫なのよね…？」

途中でレイラが恐る恐る聞いた。

「そう…それで人間も対抗してたんだけど…竜には敵わなくて…」

アリューは一息入ってから続きを口にした。

「…それでノアが…」

「ノア…この竜が…？」

「人間の力になったんだ。ザムナンって人がノアと竜の契約を結んだ。この指輪で…」

そついうとアリューは指輪を眺めた。

さつきとは何か違う感覚があつた。

まるで指輪からノアの意味が伝わるようだった。

「その…竜の契約で…そんな痣ができたの…？」

「契約を結んだ竜と人間は互いに全てを共有する…らしい。だからこれは…ノア達の痛みなんだ…」

口を閉ざしていたノアが急に空を見上げた。

アリューも続いて咄嗟に上を向いた。

白い竜達がいる。

今度は一匹ではなかった。

白い群れがアリユー達の遙か上空を飛び回っていた。

アリユーはレイラの腕を掴んだ。

「…行くぞ。」

「え…!?!」

「もうこの町は駄目だ。」

レイラは戸惑ってアリユーに反発したが、アリユーはレイラの腕を無理矢理引っ張り、ノアの首元にのし上がった。

『早く…何処かに…あの竜達を振り切ってくれ。』

『……。仰せのままに…我が主人よ。』

ノアは少し口ごもった様子を見せたが、アリユー達を乗せたまま大きな翼をはたかせた。

レイラが声を上げてアリユーにしがみついた。

ノアの碧い巨体は大地を離れ、空に飛び上がった。

白い竜達が数匹追い掛けてくる。

レイラはノアから落ちないようにアリューにしがみついた。

白い竜の一匹が口を大きく開き、アリュー達に炎の息を吐き出した。

ノアは旋回しながらそれをかわすと、白い竜達の方に向き直った。

一瞬、アリュー達は体を焼かれるような熱さを感じた。
と同時に、ノアの口から青白い炎が吐き出された。

青白い炎は、白い竜の赤い炎を飲み込み、さらに白い竜達を包んだ。

『……………！！！！！！』

言葉にならない竜達の悲鳴が、アリューには聞こえた。

そして突然、アリューの契約の痣が痛みだした。

察知したレイラが小さく声をかける。

「ア…アリュー…痛いのか？」

「…ツウ…大丈夫だ…これはノアの痛みだから…」

レイラにはその意味がわからなかった。

ノアは青白い炎に包まれた竜達を背にし、まだ薄暗い空を飛び続けていった。

ル・グエン「ゲイルは、白い竜に乗り、本を片手に世界を見下ろしていた。

彼の周りには無数の白い竜が群がり、まるでゲイルに付き従うかのようだった。

「素晴らしい…なんと素晴らしい世界か…私の創る、清浄なる世界だ…！」

ゲイルの下には炎の海と化した大きな都市があった。

ゲイルは満足気な笑みを浮かべながら、何事か呟くと竜の群れを率いてさらに遠くへ飛び去っていった。

辺りは未だに薄暗いままだった。

アリューが上を見上げると、空は黒がかった雲に覆われていた。

アリュー達は遠く離れた小さな丘にいた。

そこからは遠くに小さな町が見えている。

アリューとレイラはノアを横目に座って、ぼんやりと遠くの町を見ていた。

レイラがポソリと呟いた。

「……………ねえ」

「……………ん。」

「……………私達どうなのかしら……………」

「……………しらねえよ。」

アリユーにもどうしていいやらわからなかった。

突然のことが余りに突然に起こりすぎた。

俺は一体何をしなければならなんだ？

二人はまた黙り込んだ。

丘の色が少しずつ明るく、そして朱くなっていく。

レイラがまた口を開いた。

「あんだ…この竜と何処かに行っちゃうの？」

「……………」

「…また一人になるの？もう帰る場所もないのに…」

レイラは力無くそういうと、顔を両膝に埋めた。

じっとしていたノアがアリユーに語りかけた。

「我が主人よ…何を迷っているのですか？」

アリユーは振り向かずにはそぼそと竜の言葉で返した。

「…わかるだろ…何すりゃいいのかわかんないんだよ……………あとその喋り方やめろ。」

するとノアは急に流暢に喋り出した。

『…では答えが欲しいのか？』

アリューは少しうつろたえたが、直ぐに答えた。

『しらねえよ…俺は…』

アリューはレイラを垣間見た。

まだ顔を膝に埋めたままだった。

アリューは淋しげな声で話した。

『俺は…ただ普通に暮らしたいんだ…』

竜だかなんだかしらねえけど…なんでこんな目に逢ってるんだ…？

お前ら何者なんだ？

なんで俺達を襲うんだ！？』

途中からアリューは憤った声になっていた。

しかしノアは全く気にせず語り出した。

『それはお前達の業だ。』

「……………」

『我々は本来人間に干渉する種族ではない。しかし人間はこの星を壊し、我々を省みなかった。我々是我々の身を守るために戦っている』

ただけだ。』

語っているノアの大きな瞳は、陽に照らされて妙に鈍く光っていた。

『だが古よりある竜の契約術を知っていた男が現れた。お前に見せた記憶に出て来たザムナンという男だ。』

ザムナンは我々に許しを請うた。全てをやり直す機会をくれ、とな。』

アリユーは黙って耳を傾けていた。

『そして契約を結んだ私はザムナンに従い、同胞を傷つけた。もちろん私は契約に従う他にない。しかしそれ以外に私が人間共に味方した理由はあった。』

『契約において我々は、人間と同じ感情を持つようになる。下らぬ話だが契約後私は人間に興味を持ち始めた。奴らにやり直す機会を与えてみようと思い始めた…』

ノアはゆっくりと首をアリユーの方に向けた。瞳はギラリと光っていたが、どこかに穏やかさがあった。

『そして…ザムナンは私と私の同胞を封印した。一体どうして知ったのか奴は我ら竜族に対する封印術を使った。我々は以来、今まで封印されていた。』

『その封印が…何故解けたんだ？』

アリユーは真っ先に浮かんだ疑問をぶつけた。

ノアはまた、冷めた声に戻って言った。

「…大方ザムナンは封印術を何かに記して遺したのだろう。それを誰かが見つけた…それ以外に我々の封印が解けることは有り得ぬ。」

それを聞いた瞬間、アリユーは背筋が寒くなるのを感じた。

脳裏には、あの暗い鉱山の光景が浮かんでいた。

「……………まさか…」

第六章

アリユーは罪悪感に似た焦燥感を感じていた。

予想に過ぎないが、これまでの出来事はそれを裏付けるには充分だった。

アリユーの掘り出した、あの謎の本にゲイルが執着していた理由。

そしてノアから聞いた竜の封印術。

全てを繋ぎ合わせた結論は一つしかない。

アリユーの見つけたあの本こそ、竜の封印術を記した、竜を意のままに操るものだったのだ。

そしてそれは共に埋まっていたこの契約の指輪との関係を考えても、紛れも無いことだった。

「俺が…あの本を見つけたから…？」

「……間違いないな。お前の記憶にあるその書物には、我々を封印する術が記されている。」

ノアはアリユーの記憶に触れながら言った。

「全く厄介な物を見つけ出したものだ。封印を解かれた竜は、封印を解いた者に従う必要がある。その者が死ぬまでな……」

『…お前は何でそいつに従わないんだ？』

『簡単な事だ。契約の力は封印に勝る。お前が契約を破棄しない限り、私はお前の忠実な、下僕だ。』

また

「下僕」の節に皮肉を込めてノアは言い放った。

『変な決まりがあるんだな、竜つてのは。』

『我々が望んだわけではない。我々が生まれた時からの契約だ。我々はそういう存在なのだ。でなければ人間ごときに使われるのを潔しとするものか。』

アリューは複雑な気持ちになって俯いた。

『…俺はどうしたらいい？』

『その人間と生きたいのだろう？』

『だからそうするには…』

『安寧を得たいならば、我々を消せば良い。』

アリューはパツとノアに振り返った。

ノアは笑いながら（アリューにしかそれはわからないが）静かに話した。

『人間とは…つくづく不思議な生物だな。こうやって消え逝く者を哀れむ。今の私には理解できるが…』

『…お前は…死んじまってもいいのかよ…』

するとノアは数秒の間口を閉ざした。

そしてゆつくりと、静かな口調で語った。

『…契約を結んで人間の感情を得るまで、考えたこともなかった事だ。…そうだ、今の私は死を恐れている。全く人間だけの下らぬ感情だ。』

『……お前……』

『我々は人間共より遙かに長い時間を生きる。それこそ何千年とな。しかし人間より短い、それこそ一年も生きられぬ小生物でさえ、死を恐れることはない。死を恐れ、生にしがみついては欲望に駆られる愚かな種族は、お前達人類だけだ。』

ノアはそこで一息入れた。
そして淡々と続けた。

『だがどうだ…今や私は契約によって人間のように消失を恐れ…そして………』

『…そして…何だよ。』

ノアはまた自嘲するように笑った。

『私は幸福を感じるようになったのだ。人間のような。』

『……………』

アリューはいつの間にかノアの話に引き込まれていた。

そして不思議と、心が落ち着いていくのを感じた。

『全くもって下らぬ……だが悪くはない。』

『……………そっか』

アリューには、いつの間にかノアの心も穏やかになっているがわかった。

これがノアの言っていた幸福なんだろうか。

しばらくしてから、ふとアリューは声をかけた。

「……レイラ。」

レイラはアリュウの声にも反応せずに、未だに俯いたままだった。

アリュウは宿めるように続けた。

「俺は…ちゃんと二人で暮らしたいんだよ。レイラもそうだろう？」

レイラは膝に顔を埋めたままで、ゆっくりと首を下に動かした。

「…絶対戻ってくるから…待っててくれよ。」

レイラは顔を上げてアリュウを見た。

「俺じゃないと…出来ないんだってよ…俺が……止めないとダメなんだ…」

アリュウはレイラの方を向いた。

「俺は…行く。…だからちゃんと帰る場所用意しといてくれねえか？」

レイラはすねたような表情になると、ポソツと言った。

「……………ちゃんと帰ってきなさいよ……？」

アリユーはコクンと頷いた。

二人は立ち上がるとノアの背に乗り、ノアは翼を羽ばたかせて遠くに見えていた町に向けて飛びだした。

既に辺りは夕日で真っ赤に染まり、ノアが巻き起こす風の音だけが響いていた。

アリユーは考えていた。

これが俺の運命なのか？

古代人の尻拭いをする 것인가？

俺は竜の契約を交わした血族だから捨てられた？

何故俺は………

…いや………そんなことはどうだっていい……

俺は世界を見て回りたいかったんだ、家族のレイラと………

ただ普通に俺の生きたいように生きたいんだ。

邪魔なんかされて堪るか。

竜とか契約なんかはどうでもいいさ。

俺は…世界を元に戻してやる…

俺にはその力があるんだから。

『…行くぞ。』

レイラを町に残して、アリューはノアの背に乗った。

レイラのいる町は遠い国の小さな場所なので、竜に襲われることはしばらくはないはずだった。

アリューは町の方を振り返った。

空を飛びながら眺める町が小さかった。

アリューは世界が小さいということを知った。

そして不思議な気持ちになった。

こんなにも人間は小さいのか…

何故俺はこんなことをしているんだろうか…

するとアリユーの考えを感じたノアが語りかけた。

『止めておけ。人間の存在価値等量れるものではない。』

「…え……………」

『何故我々が存在するのか？何故人間は愚かなのか？何故お前は命を賭けて人間を救おうとしているのか？』

『…そりゃ俺は…』

『あの人間を助けたいのだろう。』

『……………』

アリユーはノアが何を言いたいのか薄々感じ取っていた。

『ならばそれで良い。何かを守るために戦えば良い。はっきりとした理由等、意味をなさない。』

『…そうだな…それ以外わかんねえよ…』

『…全てに意義を求めようとするのもまた人間の愚考よ。だがそん

なものに答え等ありはしない。ただ思うままに生きるのが、我々生物の必然だ。誰が何をしようとも…」

ノアは不意に速度を落とした。

「…どうしたんだ？」

「先に言っておこう。どうやらお前は私を死なせたくないようだが、そのような迷いは破滅を招くのみだ。」

ノアは淡々とした調子で続ける。

「よいか、人類が安寧を得るには我々を封印するしかない。」

「封印…か？」

「その術はゲイルとやらが持っている本に、ザムナンが記した筈だ。馬鹿なことをしたな…」

「…その封印書を取り返せばいいのか？」

「そして我々を封印し、本を焼き払え。今のお前ならば可能だ。二度と我々が姿を現すこともあるまい。」

それを聞いたアリュウが何か言う前にノアは言った。

「迷う必要等ない。はっきり言っておく。人類からしてみれば我々竜族は天敵だ。元来、人間を監視するような種族だからな。本来我

々が人間に干渉する時は、我々が人類を滅ぼす時だ。情けをかければ滅びるのはお前達だ。』

『…お前はどうかんだよ？』

淡々と喋り続けたノアにアリューは問い掛けた。
そしてノアの心に揺らぎが生じたのを感じた。

『……何だと？』

『死にたくないんだろ？封印されるのに何も嫌じゃないのか？人間の心もあるんだろ？お前はどうしたいんだ？』

しかしノアは速度を上げただけだった。

そして何も言わなかった。

アリューにはノアの心の奥が解っていた。

本当は死にたくはない。

今は人間と同じ心を持っているから…

でもそれは愚かだとも思っているんだ。

だから…

俺は…俺の成すべき事をするんだ。

ノア諸とも竜を封印して…

ゲイルを止める…

ノアは黙ったままでひたすら飛び続けた。

アリューにはそれが何故か悲しげに思えた。

どれくらいノアは飛んでいたのだろうか。

アリユーがあまりの風圧についに気を失いそうになった時、二人は何かを感じた。

ノアは速度を落として、滞空状態になった。

『いるのか…？』

『…派手に人間を消しているな。見えるだろう、空が赤くなっているのが。』

アリユーは山の見える遠くの空を見た。
空が赤く染まっている。

どうやら竜達の作った火の海があるらしい。

アリユーは覚悟を決めた。

『…行こう…』

ノアは再び速度を増し、赤い空を目指した。

あそこに……ゲイルと竜がいる。

第七章

赤く燃え上がっている町。

無数の白い竜が町の上を飛びまわる。

その竜を倒さんとして、人間達が果敢に銃弾を放つ。

そこには白い竜の背に乗り、不敵な笑みを浮かべる男がいた。

ル・ゲエン「ゲイルは満足気な声を上げた。

「ハハハハ…愚かだな…制裁を受ける可き種族が彼等に刃向かうか
…」

そういうとゲイルは竜の言葉で何かを呟いた。

するとゲイルを囲む白い竜の一匹が、地上に急降下した。

爆音のような音と共に竜が着地すると、数十人の人間達が竜の鋭い爪の餌食となった。

「ふん…小さいな…全くもって小さい生き物だ我々は…」

ゲイルは蟻のように潰される人間を見下ろしながら、呟いた。

その時

「!？」

ゲイルの眼に、別の竜が飛び込んできた。

『 許せ………』

次の瞬間、先程よりも凄まじい爆音と共に、地上に急降下した白い竜に、その倍の体の碧い竜が襲い掛かった。

「な……………何だと!？」

白い竜は踏み潰され、無惨な肉塊となっていた。

碧い竜は、地上から白い竜の群れを見上げた。

『……………いたな。』

碧い竜は飛び上がった。

ゲイルは目の前にやってくる、壮大な碧い竜ノアの姿をじっと見ていた。

そしてその背に乗る小さな人影も確認すると、大きな声をあげて話しかけた。

「……………君がまさかあの時契約の指輪を持っていたとは思わなかった!」

「……………」

アリューは黙って白い竜の上にいるゲイルを見ていた。

……ゲイルは全部知っている。

契約のことも、封印の事も知っていたんだ。

「だが私は君を敵だとは思っていない！話をしよう！」

「……………竜を使って何をするつもりだ！？」

アリューはゲイルに叫び返した。

ゲイルはにやりと笑ってみせる。

「君は竜と人間の歴史を知っているか！？」

「知ってる！竜が人間を滅ぼそうとしたことも、ノアが人間を救ったことも！」

「では私と来い！人間はあの時滅びる可きだったと解るだろう！？」

「嫌だっ！！」

ゲイルは少し意外そうな顔をした。

が、また諭すようにアリユーに言った。

「君は世界を知らんのだ！！人間がいかにも小さく愚かな種であるかを！」

「知ってるさ！充分に見た！けどだからってあんたが人間を滅ぼしていいわけじゃねえ！！」

「私が滅ぼすわけではない！制裁を下すのは彼ら竜族だ！彼らこそが人間という種を修正できる、唯一の神なのだよ！」

狂ったようにゲイルは語っていた。

人間を排除するというその思想は、アリユーには本当に理解し難いものだった。

アリユーはゲイルを睨み付けた。

「……俺もあんたも人間だろうが！！！」

「……」

ゲイルは意表をつかれたような様子を見せた。

「……残念だ。君は選ばれた人間だったというのに……！」

「俺はそんなじゃない……！」

アリユーが唸ると、ノアも同時に唸り出した。

「俺はただ生きたいんだ！あんたが人間をどう思っても俺は普通に生きたいだけだ！」

『人間自身が生きるかどうかを決めるのは人間自身だ。我々是我々の意志で人間を滅ぼす。余計な事はやめておけ。人間が語る裁きはどうやって人間に返ってくるぞ。』

「黙れッ……！！！」

ゲイルはとてつもない大声で叫んだ。

その声には怒りが含まれていた。

「自身がよければそれでいいというその愚かさが全てを破滅させるのだ!!」

ゲイルは地上を見ながら叫んだ。

「今この地で死んでいった人間達が此处で何をしていたか、君にはわかるかね!?……戦争だ!」

アリューはふと、地上をかいま見た。

無数の人間の死体の側には、また彼らが用いた無数の武器が散らばっている。

「大地を破壊し、果ては同じ人間同士で殺し合う!かつての滅びの歴史を今また人間は繰り返そうとしているのだ!!」

「……………」

アリューは黙っていた。

ゲイルの言うことが間違っているとは思えなかったのだ。

そして自身も人間だったからだ。

が、その時ノアがゆつくりとゲイルに語りかけた。

『…愚か者め。』

「…！？」

『貴様のやろうとしていることは違うといつか？貴様とて同じ人間を憎み、人間の手で殺しているではないか。』

今度はゲイルの方が黙っていた。

『それが粛清だとしても言うつもりか？竜の力を借りねばならぬ貴様のような人間が本当に世界を変えられると思うのか？下らぬ。』

ノアが語る間もアリユーはノアの意思を読み取っていた。

そう、人間が人間を裁けるはずがない。

裁くとすればそれは神。

竜族だ。

人間が竜の力を借りても、結局は同じ結果になるんだ。

ゲイルは少しの間アリュール達を睨み続けていたが、ただ一言を口にした。

「…人間に染まったようだな碧き巨竜よ。」

ゲイルは次の言葉を竜の言葉で語った。

『あの碧い竜を殺せ。』

白い竜達は一斉に猛りをあげた。

ノアが戦闘体制をとる。

『……振り落とされるな。』

『…戦うのか？』

『それしかあるまい。人間が生きるためにはな…』

ノアはそう言い残し、大きく羽ばたいた。

一頭の白い竜が突進するように向かってくる。

ノアはそれを迎え撃つように前に飛び、いきなり勢いをつけたまま白い竜の首筋に牙を起てた。

白い竜は大きな悲鳴をあげる。

しかし間もなく他の白い竜が襲い掛かり、四方からノアに牙を向けた。

が、ノアはくわえていた白い竜の体を大きく振り回し、近づく竜を薙ぎ払った。

そして角のついた巨大な尾を振るい、背後からの攻撃を退けていた。

アリユーは激しく動くノアの体に、意思を通じながら辛うじてつかまっていた。

白い竜はほぼ際限なく次々と襲い掛かる。

ふと、アリユーは突然身体が焼かれるような熱を感じた。

と同時にノアが青白い炎を吐き出した。

前方にいた白い竜達は一斉に赤い炎を吐いたが、青白い炎が全てを飲み込んで白い竜を焼き尽くした。

『……………!』

「（すげえ……………）」

アリユーはノアの炎の凄まじさを見て、神々しさに似たものを感じていた。

巨大な碧い竜に、改めて畏怖と敬遠の感情を抱いていた。

「グゴアオオツ!!」

「!?!」

その時、ノアが悲鳴をあげた。

炎をかい潜り、上から襲ってきた白い竜がノアの尾の付け根に噛み付いたのだ。

ノアは大きく体を振るってそれを振り落とそうとした。

噛み付いた白い竜は辛うじてノアから離れた。

が、ノアが怯んだその一瞬について、周囲の白い竜達が一斉に飛び掛かって来た。

『降りろ!』

ノアがそう叫んだのがアリューには聞こえた。

そして同時にアリューは体が浮くような感触を覚えていた。

ノアは咄嗟に体を急降下させ、可能な限り地上に近づいた。

そしてそれを追った白い竜が自分の体に取り付いた瞬間、体を大きくうねり反転させた。

「
かつ !!!?」

アリューは余りの反動にノアの背から弾き飛ばされ、地上に落下していった。

そして意識しないほどの時間の後、ドサァッ!という音が地面に響き、アリューは土の上にたたきつけられた。

「ツグ……う……」

体中が痛みながらもアリューは上空の様子を垣間見た。

ノアは激しいうめき声をあげながら白い竜を振り払い、しかし再び襲い来る白い竜に身体を傷つけられていた。

アリューはそのノアの痛みすらも感じ、同じ様に苦しみ、うめいていた。

ダメだ

アリューは苦痛の中で絶望した。

やはり世界を救うなどということは出来ない。

自分には荷が重過ぎた。

自分は一人の人間だ。

たった一つの小さな存在なのだ。

そんな考えがアリユーの脳裏を掠めた。

「解るだろう…これが人間の力だ。」

その時間こえた声の方向にアリユーは苦しんだ表情のまま振り向いた。

いつの間にかゲイルは白い竜に乗り、アリユーの目の前へやってきていた。

「君一人の力では何を変えることも出来ない。人間は弱く、小さく、そして愚かなのだよ。」

ゲイルは哀れみともとれる口調で言った。

「人間が生きてどうなる？君が生きてどうする？君に世界を変える

「ことが出来るか？人間を変えることが出来るというのかね！？」

「……………違う……………」

「アリユーは強く口にした。」

「人間がどうか……………世界とか……………俺は知らない……………」

「そっだ……………」

「俺はただ生きたかっただけだ。」

「世界を救いたいなんて考えた訳じゃない。」

「正直言って、世界なんてどうでもいい。」

「俺は……」

生きてやる。

裁きがあっても、何があっても生きて。

家に帰って、レイラと飯を食って。

人間らしく生きてやる。

「俺は…生きるんだ…！」

アリユーは体に力を込めた。

意識が混同し、不思議と立ち上がる力が湧いてくる。

ゲイルはアリューから何か強烈な感情を読み取り、焦ったように目を見開いた。

「な……なんだ………」

「邪魔するなアー!!」

アリューは半ば意識が飛びそうな状態で体を起こし、力の限りに叫んだ。

そしてその瞬間、上空からも雄叫びが轟いた。

最終章

激しい発光が起きた。

それは青白く、まばゆい輝きだった。

声が轟いたその時、上空で何が起きたのか、地上にいた者には一瞬解らなかった。

「神竜……ノ……ア……」

ゲイルは青白い発光体、上空で輝くノアの姿に目を奪われていた。

『……お前の負けだ、弱き人間よ。』

先程までノアに攻撃していた白い竜達は、まるで畏れるようにノアの周囲に留まっている。

その中に鎮座するノアは厳かな口調でゲイルに語りかけた。

『その男の生きる意志は何者にも侵されることはない、諦める。貴様にこの人間を殺すことは出来ぬ。』

アリューは何が起きたのか解らなかった。

ただ強く念った瞬間、ノアは今までと全く違うオーラを放っていた。

それは

「神」といっても遜色のない程の、尊大さと神々しさだった。

ゲイルは動揺していた。

「そんな……何故だ……完全なる調停者が何故滅ぶべき人類を肯定するのだ!？」

『何故滅ぶべきだと言う？』

静かにノアは声を発する。

「に…人間は全てを破壊する！現に彼らは一度この大地を滅ぼし…」

『そして…我ら自然の裁きを受け、再び甦らせた。』

……そうだ。

人間は一度、なにもかも壊そうとして……

竜達……「自然」の報いを受けたんだ。

…そして今がある。

アリューには実感出来るものではなかったが、両方の会話を理解することは出来た。

『何故人間は再び大地を甦らせた？それは人間も自然の一部であるからだ。』

「う……………う……………」

ゲイルはノアが放つ神懸かった波動に、もはや何も言い返せずにいた。

『しかしそのような考えをめぐらせるのは人間だけの愚かさであり、智恵でもある。』

『貴様は人間だ。貴様が壊そうとしている人間は自然でもある。人間を滅ぼすことは他でもない、自然を滅ぼし、自らを破滅させることだ。』

「だ…だから何だと言っただけ！！」

ゲイルは半ば我を忘れたように叫んだ。

「例え人間が自然であろうともそれを破滅させるのも人だ！！人は神の手によって…」

『神など、いない。』

ノアはそう言い切った。

ゲイルは口を閉ざしてしまった。

『いや…流れ、というものが神とするならば、我々の行為は神に依るものだろう。』

『貴様はただ我々の力を神と崇め、自らの理想の実現を計ったに過ぎん。』

突然ノアの体が光を放ち出した。

ゲイルはそれを見て震え上がった。

「や……やめろ…私は間違っていない……！」

『そう、間違っではない。貴様は神ではない。…ただの人間だ。』

光は強くなった。

と思うと、瞬間に光はノアの一箇所に集まり、大きな塊となって放出された。

光の塊は、地上のゲイルを襲った。

「お…おおおおお……！」

アリユーはたじろいだ。

ゲイルはその燃えるような光の中で、すさまじい声を上げていた。

「な、なぜだ！私は……わ私は世界を救おうと……！」

「……あなたは……」

アリューはゲイルを強く見て言った。

ゲイルは、哀しみともとれる表情を浮かべているようだった。

「あんたは世界を壊そうとしたただけだ。誰も制裁なんか望んでなかった……」

もはや形を失いつつあったゲイルはアリューの方を向いた。

ゲイルは苦笑した。

「君にも……いずれ解るだろう……世界……人の……弱さ……あ……」

アリユーは少し目をしかめた。

ゲイルは白い光に包まれ、灰になるように消えていった。

後には、ゲイルの服と彼の持っていた封印の書が残っていた。

『…さあ、お前の全ては終わった。』

空中から、ノアが語りかけてきた。

アリユーは上を向いた。

『我々を封印するが良い。いずれまた、かのような者によってそれが解かれたくなければ、封印を燃やすがいい。』

「……いいよ。」

アリューは少し間を空け、落ち着いた声で言った。

空中で竜が無数に羽ばたく音の中、アリューは強い調子で叫んだ。

「竜がいなくなったら…また人間は滅びてしまう。」

『……その通りだ。人間はいつか必ず、再び自らの手で破滅の道を選ぶ。』

その時にアリューはいないかもしれないかった。

おそらくは再び文明が過去に回帰した時だろう。

そしてその時に裁きをくだす竜がいなければ、人間はそのままいなくなってしまう。

「だから……また人間が道を間違えた時に……世界を救ってくれ。」

ゲイルの言ったことは、おそらく間違っていない。

そして、人間も神じゃない。

『……面白い男だ。ザムナンと同じ事を言う。』

「……………」

『奴もまた我々に未来を託したのだ。いつか人類が辿るであろう滅びから救ってくれとな。』

ノアはゆっくりと地上に降りてきた。

そして大きな足音をさせながらアリューに近づいていった。

『竜が人を裁き……人は抗う。そして人の意志が強ければ人はまた生きる。どうやらお前の意志は生きるに値したようだ。』

ノアはアリューの目の前に首を倒し、背に乗るように催促した。

『我がこの姿になったのもその人の意志が強かった影響だ。……さあ、お前を待つ者の所へ帰るがいい。強き人間よ。』

アリューは失笑し、ノアの首に登って言った。

「……俺はただ……死にたくなかったただだ。」

『それが生きることだ。迷うことはない。人間としてならお前はゲイルより余程正しい生き方をしている……』

アリューには、ノアがふつと笑ったように聞こえた。

それが自嘲なのか恍惚なのか、それとも羨望なのかはわからなかったが。

ノアは雄叫びをあげた。

周囲にいた白い竜達は同調し、一斉に唸りをあげた。

ゲイルがノアを

「神竜」と言っていたのがアリューには何となくわかった。

ノアが空高く飛び上がると、それに続くように白い竜達は後を続いて飛び立つ。

それは神の行進であるようにも見えたからだ。

アリューはレイラと再会した。

町から飛び出して来たレイラは、アリューに飛び付いて無事を喜んだ。

ノアは、白い竜達の待つ空へと再び飛んだ。

『…この指輪も、いつか来る時のために置いておくよ。』

アリューは、封印の書と共に、しっかりと契約の指輪を握った。

『そうだな……だが』

ノアは、飛び去りながらアリューに語りかけた。

『いずれ、そのような……裁きの要らない世界が作られれば……我々はじっと身を隠していよう。本来ならば在る可きではないのだ我々は、人間にとってはな。』

『そんな事ないさ。』

アリューが言おうとする前に、竜達は遠い空に消えていった。

だがアリューはしっかりとノアに語りかけた。

『俺達も竜達も……生きてるんだ、それだけでいい……そうだろノア。』

『……ふん、下らぬ。』

ノアの最後の言葉をアリユーは聞いた。

「……ま、もう要らねえよな……」

アリユーは指輪を外した。

プツリと、何かが途切れた。

「……いいの？」

「うん……もう要らない。初めから要らないはずだから、な。」

心配そうな顔をしたレイラにアリューは苦笑気味に答えた。

そして消えていく碧と白の影を遠目に見つめながら、ため息をついた。

「…腹、減った。」

「え？」

「腹減った。何か食べたい。」

彼の試練は終わった。

次に試練を受けるとすれば、それは人類である。

彼らに裁きは下るのだろうか？

人と竜達は、再び歴史を繰り返すのか？

それは竜にもわからない。

ただ、神のみぞ知るばかりである。

最終章（後書き）

あっけない終わりでごめんなさい……どうでしたでしょうか。ちょっとだけ言いたい、ということでも言っていただけと飛び上がって喜びます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7779d/>

DRAGNEEL

2010年10月21日22時44分発行